

國學院大學學術情報リポジトリ

The Structure of Sentences with “Koso” and Its Corresponding Elements, and the Logic of Kenko's Recognition

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Nakamura, Yukihiro メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000504 |

『徒然草』 コソ係結文の構造と兼好の認識の論理

中村幸弘

まえがき

いま、「こそ—已然形」文は逆接条件法表現に始まるなどとする起源論^①は忘れることとする。中古の和文の時代を経て、コソ係結文は、コソに拘束されて文末に位置する述部が已然形で結ばれる現象こそが正規の用法と認識されていた、と見てよいであろう。擬古文『徒然草』は、コソを多様な語句に付けて用いている一方で、兼好独自の万象認識の表現形式のなかに採用してもいたようである。先学の多くのご論考の学恩をいただきたい

てはいるが、この問題について、それと特定できる先行研究に出会えているわけではない。旧稿の一部を引くことにもなるが、それは、兼好の誤解も含めた兼好の文体であった。

一、文末述部を拘束するコソと、そうでないコソと

連体修飾語が文の成分にならないことに気づいてようやく、そして、いくらか、文の読解速度が速くなった。そのように、連体修飾語が文の成分とはならないことに気づくことができたのは、係助詞「ぞ」「こそ」などが、どういう語句にしか付か

ないかを、少しゆっくり確かめたからであった。教室でそう眩
いて、生徒・学生に同意を求めた日があった。

そのころ、学校図書株式会社『中学校国語』（昭和五十年度版）
の「ことばの学習」の、特に〈文の構造〉を担当することになっ
て、一文を直接的に構成する成分に限って文の成分とし、いわ
ゆる文節文論を否定する立場をとることになった。³⁾一文節であ
ろうと、一文の直接的構成要素となるものはすべて部と呼んで、
主部(○○○)・述部(○○○)・修飾部(○○○)・接続部(○
○○)・独立部(○○○)だけが文の成分であるとしたり。主部・
修飾部・接続部は述部と結びつく関係にあつて、連体修飾語や
並立語や補助語・被補助語は、文の成分の内部の構造をいうも
のでしかなかった。

その原則を、古典語文の係結に当て嵌めた結果、係助詞「ぞ」
「こそ」が下接するのは、主部・修飾部・接続部に限られるこ
とが確認された。そして、述部の一部となる被補助語にも下接
することが、当然ながら確認された。以上を整理したものが、
旧稿「係結の構文論的取り扱い」である。八代集和歌から該当
用例を引いて口頭発表したのが、用例数が多すぎ、論文化する際
には、日本古典文学大系『古今和歌集』に絞ることとした。

その後、引き続き、その作業は、散文資料に拠って継続す

る計画となっていた。作品は『土佐日記』か『徒然草』かと目
論まれて、『徒然草』の作業がいくらか進行したところで、テ
キスト間の句読の違いが気になって中断してしまった。長い時
間が過ぎて、その句読のほうに注目して、『徒然草』の句読⁵⁾
という、『徒然草』の構文上の問題点の一部について句読の異
同を通して報告することになった。

『徒然草』のコソは、連体形準体法に付く用例が、まず注目
される。それは、時枝誠記編『徒然草総索引』（至文堂・昭和
三十年）を眺めることで、いっそう強くそう思わせられた。続
いて、その連体形準体法にコソが付いた文の成分が、どんな述
部と結びついているかという、形容詞已然形であるものが際
立って見えたのである。さらにその連体形準体法にコソが付い
たその成分の上に、どちらかという抽象概念性の名詞（Ⅱ次
章で取り上げる「人」「世」「女」「色」「命」など）が提題
のはたらきの「は」を伴って存在する用例が、際立って見えて
きた。いずれにしても、述部は、形容詞已然形が際立ち、形容
動詞已然形と、そうでなくても、形容詞相当といつてよい語句
の已然形とがとにかく多かったのである。

この観察には、排除しなければならぬコソを用いた語句が
ある。文末の述部に結びつかないコソを含む語句である。既に

旧稿「係結の構文論的取り扱い」で確認している補助・被補助の關係の被補助語に付くコソは、述部内に用いられているもので、それ以前から述部内強調と呼んできている。それらより先に浮かんでくる「こそ―已然形」、「逆接用法といわれる挿入文は」、「朝夕あさゆふなくてかなはざらん物こそあらめ、…」（徒然・一四〇）など、直ちに拾い出せる。さらに、結びの後に「ども」が付いてしまっている会話文の用例「…、ひじり聖、それはさこそおぼすらめども、…」と…」（徒然・一四一）などもある。排除しなければならぬ各用例である。

小稿は、『徒然草』のコソ係結文がどのような構文を構成しているかを確認したうえで、そのなかの頻出されるコソ係結文に兼好が万象を認識するための兼好独自の表現形式が存在したかに感じとれたところから、その追跡をしようとするものである。そこで、以下の検討の対象となるコソ係結は、そのコソが文末述部まで拘束するものでなければならぬ。以下の検討に先立って、文中にコソが用いられていても、文末述部にまでその拘束が及ばない用例は、小稿の検討対象から除外することをあらかじめ断っておくこととする。また、使用テキストは、新編日本古典文学全集本に拠ることとする。

二、提題のハ・モ十主部（〓対象語）となる連体形準体法に付くコソ十述部（〓形容詞・已然形）から成る文（A構文）

ハによって提題したうえで、その焦点となる事柄を連体形準体法にした準体法体言にコソを伴わせて主部としている文が、まず認識される。その主部は、よく観察すると、対象語であり、その対象語についての心象が形容詞（形容動詞を含む）やそれらに準じる複合活用語の已然形で結ばれている。

a 提題のハを用いているものと、そうでないものが存在するので、ハを用いたものをAa構文と呼ぶこととする。

(1) 人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。(一)

提題の「人は」は、〈人トイウモノハ〉と解される。概して、この提題には、抽象概念性の一単語名詞がハを伴っている点で、ほぼ共通する。述部が形容詞のうちの特に心象評価する形容詞であるところから、その準体法体言がコソを伴った文の成分を主部（〓対象語）と呼んで取り扱うことにする。以下、直ちにそれとわかる用例を引く。

○世は、さだめなきこそいみじけれ。(七)

○女は髪のめでたからんこそ、人の目たつべかめれ。(九)

さて、用例(1)の次の文は、同じ「人は」を提題とするものである。前文との関係で、直ちにそれとわかる用例も引くこととする。

○「人は、」ものうちいひたる、聞きにくからず、愛嬌あり

て言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。(一)

○「色は、」露霜にしはたれて、所定めずまどひ歩き、親の

いさめ、世のそしりをつつむに心の暇なく、あふさき
さに思ひ乱れ、さるは独り寝がちに、まどろむ夜なき

こそをかしけれ。(三三)

○「命は、」長くとも四十に足らぬほどにて死なんこそ、め

やすかるべけれ。(七)

時に、提題のハが、一単語ではない短語句を掲げることもある。

○ありたき事は、まことしき文の道、作文、和歌、管絃の道、

又有職に、公事の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。

(二)

さらに、提題のハの成分が、主部(Ⅱ対象語)の次に位置づけられている用例も見る。

△下戸ならぬこそ男はよけれ。(一)

「男は下戸ならぬこそよけれ。」が背景に見えてこよう。

b 提題にモを用いたり、また提題の助詞を用いることになったりする用例も見られ、それらをA b構文と呼ぶこととする。

(2)万の事も、始め終りこそをかしけれ。(二三七)

提題が係助詞「も」によってなされていて、主部(Ⅱ対象語)も単体法体言ではなく、動詞「始む」「終はる」を名詞化した連用形名詞となっている。

△大路のさま「モ」、松立てわたしてはなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。(一九)

前文までの関係から、文頭の「大路のさま、」は「大路のさまも、」と解される。述部「あはれなれ。」は形容動詞であるが、機能としては、形容詞と同じものと見ることが出来る。「また」は、副詞と判断され、修飾部である。

以上が、A構文と名づけた「提題のハ・モ+対象語としての単体法体言がコンを伴った成分+述部」から成る文の用例である。次章においては、その提題のハ・モのない構文用例を観察していくことになるが、そこには、提題のハ・モ成分を表現しなかったところから、A構文と認定されなかった用例が含まれ

ていることが予測される。

三、主部（Ⅱ対象語）となる連体形準体法に付くコソ十述部（Ⅱ形容詞・已然形）から成る文（B構文）

前章のA構文も、本章のB構文も、その該当用例は、すべて、連体形準体法の体言、つまり準体法体言にコソが直接して、いわゆる主部となっていて、その主部が時枝文法に従うと、対象語と呼ばれる文の成分である点で共通する。その準体法体言にコソが付いて対象語となっている用例数については、既に紹介してきているように、時枝『徒然草総索引』に明らかである。その全用例がA構文かB構文か、なのである。加えて、用例②に見てきているように、名詞が対象語となっている用例も存在するのである。『徒然草』のコソが対象語を際立たせるためのものであった、といっても許されよう。

- c それほどに多いコソが伴われる準体法体言であったが、次項としてdを立項するように一単語名詞に付くコソもあったのである。そこで、準体法体言にコソが付く用例群を、あえてB c構文と呼ぶこととする。

- (3) 折節（折）のうつりかはる（折）こそ、ものごと（折）にあはれなれ。(一九)
- 追儼（追儼）より四方（追儼）拜につづくこそ面白けれ。(一九)
- 名利（名利）に使はれて、しづかなるいとまなく一生を苦しむるこそ愚かなれ。(三八)
- 久しく隔たりて逢ひたる人の、我が方（方）にありつる事、かすかすに残りなく語りつづくこそ、あいななれ。(五六)
- 人の語り出でたる歌物語（歌物語）の、歌のわるきこそ本意なれ。(五七)

漢詩を引いたり、会話文や書簡を受けたりした準体法体言に付くコソも見られる。

- 「沉・湘日夜、東に流れ去る。愁人の為にとどまること少時もせず」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。(一一)
- …、老いたる宮司（宮司）の過ぎしを呼びとどめて尋ね侍りしに、「実方は、御手洗（御手洗）に影のうつりける所と侍れば、橋本や、なほ水の近ければと覚え侍る。吉水和尚、
- 月をめで花をながめしいにしへのやさしき人はここにありはら
- と詠み給ひけるは、岩本の社（社）とこそ承りおき侍れど、おのれらよりは、なかなか御存知（御存知）などもこそさぶらはめ」と、

いとうやうやくしき言ひたりしこそ、いみじく覚えしか。

(六七)

○雪のいとおもしろう降りたりし朝、人のがり言ふべき事

ありて、文をやるとて、雪のことはなにも言はずりし

返事に、「この雪いかみると一筆のたまはせぬほどの、

ひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。

返々口をしき御心なり」と言ひたりしこそ、をかしかりしが。(三二)

りしが。(三二)

六七段の、その主部(＝対象語)には、和歌が一首、その会話文のなかに含まれている。その会話文を受けた「：言ひたりしこそ」までが、その主部なのである。三二段の、その一文は、その一件をすべて含めて、会話文を受けた「：言ひたりしこそ」、までが、この用例においても、その主部なのである。

さらに、このBc構文は、会話文や心内文のなかにも見られる、なお、次々用例の五二段に見るへ印は、筆者が私的に施した心内文符号である。

○…、「：…うちうちよく習ひ得てさし出でたらんこそ、いと心にくからめ」と常に言ふれど、…。(二五〇)

○さて、かたへの人にあひて、「：…そも参りたる人ごとに山へのほりしは、何事かありけん。ゆかしかりしかど、(神

へ参るこそ本意なれ)と思ひて、「：」とぞ言ひける。(五二)

次用例は、そこから秋の風物を取り上げる、その冒頭文である。「」内の提題の想定に無理はない。さらに、続く用例についても、そう読めてくるであろう。その述部の形容詞を受ける「と見ゆれ」は、助動詞「めれ」に相当すると見てもよからうか。

△〔秋ハ、〕七夕まつるこそ、なまめかしけれ。(一九)

△〔庭ノ佇マヒヤ室内ノ設ヘハ、〕今めかしきららかなら

ねど、木だちものふりてわざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔寛

えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。(二〇)

△汀の草に紅葉の散りとどまりて、霜いと白う置ける朝

〔ハ〕、遣水より烟の立つこそをかしけれ。(一九)

d 主部(対象語)の準体法体言が一単語名詞や連体修飾語を冠した名詞となっている用例が見られたのである。Bd構文と呼ぶことになる。

(4)神楽こそなまめかしく、おもしろけれ。(一六)

○和歌こそ、なほをかしきものなれ。(二四)

右用例は、その述部の末尾が名詞「もの」に断定の助動詞「なれ」であるところから、名詞文と見る向きもあろうが、いま、

筆者は、これらも、形容詞文と見ていくこととする。⁽⁸⁾

以下に、連体修飾語付き名詞が主部（**対象語**）となつてい
る用例を列挙する。

○岩に碎けて清く流るる水の気色**こそ**、時をもわかずめで

たけれ。(二二)

○御国ゆづりの節会おこなはれて、劍璽・内侍所わたし奉
らるるほど**こそ**、限りなう心ほそけれ。(二七)

○すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める

廿日あまりの空**こそ**、心ほそきものなれ。(一九)

○妻といふもの**こそ**、男の持つまじきものなれ。(一九〇)

○…、女にたやすからず思はれん**こそ**、あらまほしかるべ
きわざなれ。(三)

きわざなれ。(三)

一九〇段の主部（**対象語**）は、一単語名詞だけの「妻**こそ**、」
というのと、どれほどの違いがあるのでしょうか。三段の主部

（**対象語**）は準体法体言が**コソ**を伴ったものだが、その述部は、
その末尾が名詞「わざ」と断定の助動詞「なれ」となっている。

この文についても、形容詞文として受けとめることとする。

○すべて神の社**こそ**捨てがたく、なまめかしきものなれ

や。(二四)

右用例の文頭の「すべて」は、述部を修飾するのか、あるいは

は、以下のすべてにかかっているものであろうか。述部の末尾の

「や」は、係結の後に添えられた念押ししの終助詞である。

△「ものあはれは秋**こそ**まされ」と人ごとにいふれど、

…。(一九)

右用例は、俚諺といつてもよい文言である。その述部は動詞
ではあるが、(テイル)意が読みとれて状態をいうところから、
形容詞相当語と見えてくる。主部（**対象語**）が一単語名詞で
あるところから、ここで取り上げたが、Aa構文に近いことにな
らうか。

e 述部となる文の成分が、連体修飾語を冠した「心地」が
自動詞「す」を伴って、その已然形「すれ」となってい
る。主部（**対象語**）は、準体法体言が**コソ**を伴った成
分である。Be構文と呼ぶこととする。

(5) いづくにもあれ、しばし旅立ちたる**こそ**、目さむる心地
すれ。(一五)

右用例の冒頭成分は、放任表現⁽⁹⁾、独立部である。問題は、
述部であるが、その「心地」は連体修飾語を必要として、自動
詞「す」が伴われるところから状態をいうことになり、形容詞
相当語句と判断される。以下、同趣の用例を列挙する。

○人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足⁽¹⁰⁾と

したため、残しおかじと思ふ反古など破り捨つる中に、なき人の手ならひ、絵かきさびびたる見出でたるこそ、たゞその折の心地すれ。(二一九)

○山寺にかきこもりて、仏につかうまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。(二一七)

四、一単語の名詞がコソを伴って主部（主語）となり、その述部が動詞から成る文（C構文）

f 主部は、一般には、主語である用例がまず考えられるが、『徒然草』のなかのコソを伴った主部は、その殆どが対象語だったのである。実は、主部が主語であるということとは、その文が動詞文か名詞文である、ということなのである。『徒然草』には、主部（＝主語）となる用例は、一述部が他動詞となる以下の二用例をしか見ない。その構文は、C f 構文と呼ばれることになる。

(6) 「我こそ得め」などいふ者どもありて、あとにあらそひたる様あし。(二四〇)

そのC f 構文の一用例は、右に見る会話文中の用例であった。そこには、そう表現されていないが、述部の上には、一般には、

修飾部のうちのヲ格補充成分と呼ばれる文の成分が存在することになる。

○片田舎よりさし出でたる人こそ、万の道に心得たるよし
のさしいらへ(ヲ)はすれ。(七九)

右用例の「万の道に心得たるよしのいらへは」は、ヲ格補充成分で、述部「すれ」は、他動詞「す」の已然形である。

コソを伴った主部（＝主語）が他にないわけではないが、それら用例のコソは、「も」と重なったり、「のみ」と重なったりして、「…もこそ」となっていたり、「のみこそ」となっていたりするものである。今回の観察対象からは外すこととする。

五、連用格助詞がコソを伴った連用格補充成分としての修飾部が述部を修飾して述部が已然形で結ばれている文（D構文）

学校文法などでは、「修飾部」のなかに修飾だけを目的とする連用修飾語のほかに、連用格補充成分をも併せて取り扱っている。いま、その連用格補充成分としての連用格助詞の下にコソを伴っている成分が述部にかかっていって、その述部が已然形となって結ばれている一群から先に取り上げようとして

いるのである。

g 二格補充成分がコソを伴って構成されるコソ係結文の用
例から観察していくこととする。D g 構文ということに
なる。

(7) はからざるに病をうけて、忽ちにこの世を去らんとする
時に「こそ」、はじめて過ぎぬるかたのあやまれる事は知ら
るなれ。(四九)

右用例の「過ぎぬるかたのあやまれる事は」は主部(＝対象
語)であり、述部「知らるなれ。」は、他動詞「知る」に可能
の助動詞「る」が付いて自動詞性のものとなつて、それに伝聞
の助動詞「なれ」が付いている。それが「わかる」時がどんな
時かを実際立たせようとした一文ということになろう。

○京極殿・法成寺など見る(二)「こそ」、志留まり事變じ
にけるさまは、あはれなれ。(二五)

右用例文の主部(＝対象語)は、二格補充成分の後に位置し
ている。その二格補充成分の二格としての格助詞「に」は表出
されていない。そこを二格と読むについては、白石『語法と文
脈』の、「(ニコソ)」という書き込みも参考にした。

○よろづのことは、月見るに「こそ」慰むものなれ。(二二)
右用例文にも、「月見るに「こそ」というように、格助詞「に」

が用いられていて、二格補充成分ではあるが、その「に」は原
因・理由を表すものである。述部「慰むものなれ。」の「慰む」
は、「慰められる」意の自動詞である。

h ト格補充成分としての修飾部がコソを伴って、所在を示
す二格補充成分を介して、存在を表す自動詞「あり」等
の已然形で結ばれるコソ係結文である。D h 構文とい
うことになる。

(8) 「ツレツレノ境地ニツイテノ教ヘハ」「生活・人事・伎
能・学問等の諸縁をやめよ」と「こそ」摩訶止観にも侍れ。

(七五)

○凡そ、「めづらしき禽、あやしき獸、国に育はず」と
「こそ」、文にも侍るなれ。(二二二)

右用例の二格補充成分「文にも」の「文」は「古書」一般を
指していて、この用例文も(8)用例文も、ともに、どういう事柄
がどういう文献に載っているかを紹介する文となっている。

○持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、
「常よりはをかし」と「こそ」見ゆれ。(一五)

右用例のうちの「持てる調度まで、よきはよく、」は、その
述部を文末の「見ゆれ。」に託していて、「持てる調度まで、よ
きはよく見え、」と解される重文である。後続する文の「

は筆者が施した心内文符号で、その心内文を受けているト格補充成分にコソが伴われて、述部「見ゆれ。」がこれを受けている。その述部「見ゆれ。」は自動詞で、そこで、主部「能ある人、かたちよき人も、」は、対象格と認識される。

i ト格補充成分としての修飾部がコソを伴って、述部として他動詞「言ふ」等、およびそれに下接する助動詞が已然形で結ばれるコソ係結文である。D i 構文ということになる。

(9) …、「御坊をばごぼく寺法師とこそ申しつれど、寺はなければ、今よりは「ワレ、」法師とこそ申さめ」と言はれけり。
(八六)

用例(9)は、三井寺を焼け出された円伊僧正に惟これぞ継中納言が言い掛けた秀句である。D i 構文として、いま一用例見られた。

○「酒を取りて人に飲ませたる人、五百生が間、手なき者に生る」とこそ、仏は説き給ふなれ。(一七五)

j ヨリ格補充成分としての修飾語がコソを伴って、述部として自動詞が已然形で結ばれる。D j 構文である。

(10) 百葉の長とはいへど、万の病は酒よりこそおこれ。
(二七五)

D j 構文の該当用例は右の一用法である。

六、文節文論にいう連用修飾語としての修飾部がコソを伴って、それに応じる活用語の述部が已然形となつて結ばれる文 (E 構文)

k まず、その修飾部が形容詞・形容動詞の連用形で、述部が自動詞および自動詞が助動詞を伴っているコソ係結文である。E k 構文である。

(11) 今様は無下にいやくこそなりゆくめれ。(二二)
○ただ言ふ言葉も口をしようこそなりもてゆくなれ。(二二)
○女のため(二)も半空にこそならめ。(一九〇)

右の三用例とも、その述部「なりゆくめれ。」「なりもてゆくなれ。」「ならめ。」の「なりゆく」「なりもてゆく」「なら(↓なる)」は、動詞ではあるが、推移をいうだけで、概念が希薄である。それぞれが、それぞれの修飾部を補助しているようにも感じとれてくる。そうなる、それぞれの述部は補助語となり、それぞれの修飾部は被補助語となる。以下は、とにかく自動詞が述部となるものである。

○…、あやしの所にもありぬべき小部・小板敷・高遣戸なども、めでたくこそ聞ゆれ。(二三)

○…、ありつる苔のむしろに並みあて、「ワレ、」いたう
 こそこうじにたれ」「…」「…」など言ひしろひて、…。
 (五四)

1 次は、その修飾部が副詞である場合でのコソ係結文で、
 E 1 構文ということになる。

(12) よき女ならんにつけても、品くんだり、見にくく、年も長け
 なん男は、かくあやしき身のために、あたら、身をいた
 づらになさんやはと、人も心劣りせられ、わが身は、向
 ひみたらんも、影はづかしく覚えなん「ハ」、いとこそあ
 いなけれ。(二四〇)

○…、口ひきの男、「いかに仰せらるるやらん、「ワレ、」え
 こそ聞き知らね」と言ふに、…。(二〇六)

右用例中の「いかに仰せらるるやらん、」は、挿入文である。
 m その修飾部が指示語副詞である場合のコソ係結文で、E
 m 構文ということになる。

(13) 医師のもとにさし入りて、向ひゐたりけんありさま「ハ」、
 さこそ異様なりけぬ。(五三)

右(13)用例の「さこそ」については、使用テキストも「さぞか
 し」と訳している。結びとして已然形「けぬ」とはなっている
 が、「さこそ」の「こそ」をどう理解したらよいか悩まされ

もする。

○平宣時朝臣、老の後、昔語りに、「…。その世にはか
 こそ侍りしか」と申されき。(二一五)

右用例の述部「侍りしか」の「侍り」は、「あり」の丁寧語
 である。すると、コソを除くと、「かくありき」、つまり「かか
 りき」となる。そうなると、「ありき」はもちろん、「侍りしか」
 も補助語ということになり、「かく」は被補助語ということに
 なるであろう。

七、接続部がコソを伴って、それに応じる述部が已
 然形となつて結ばれる文 (F 構文)

F 構文には、下位分類としての項目が存在しない。したがつ
 て、下位分類項目記号の必要はないが、全体の体裁に倣つて、
 Fn 構文とする。

(14) …、ある人、「…。覚束なくこそ」と言ひければ、「さ候
 へばこそ、世にありがたき物には侍りけれ」とて、いよ
 いよ秘蔵しけり。(八八)

右用例の「さ候へばこそ、」は、接続助詞「ば」を用いて成

る接続部である。その述部は、被補助語「世にありがたき物には」と補助語「侍りけれ」とから成っている。四条大納言が編纂した『和漢朗詠集』をそれ以前に死んだ小野道風が書くなど、ありえないことだが、だから、世にありがたきもののだといっている、あの段である。

○孝養の心なき者も、子持ちてこそ、親の志(ヲ)は思ひ知るなれ。(一四二)

接続部の判断は難しい。明確な順接・逆接以外は、避けたいと常々思っている。特に、接続助詞「て」が導く文の成分については、接続部とは見えないほうが穏やかだ、と思っている。右用例の「子持ちてこそ」、「は(子を持つこと)によって(始めて)、〜と読みとれる。ニテ格補充成分の修飾部とでも見たほうが適切か、ともいえよう。

八、兼好がコソを最も多く用いた文の成分

本章をお読みいただくに際しては、時枝誠記編『徒然草総索引』の「こそ」の項を開いてからにしていたいただきたい。その「こそ」の項は、Ⅰ(体言+こそ)・Ⅱ(連体形+こそ)・Ⅲ(形容詞連体形+こそ)・Ⅳ(副詞+こそ)に分類したうえで、文脈

が見えるよう該当本文が引いてある。他の助詞に下接する用例については、複合助詞として、「だにー」「てー」「とー」「にー」「にてー」「のみー」「ばー」「へー」「もー」「よりー」「をー」の項への方向指示をしている。

そのⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳの四分類のうち、Ⅱが圧倒的に多いことは、既に触れてきているところである。準体法体言にコソが付く用法の多いことは、直ちに見えてくるのである。そのⅡには、小稿のいうA構文・B構文の殆どが、そこに含まれる、ということである。A b構文やB d構文のなかには、Ⅱだけでなく、Ⅰのなかにも該当する用例が若干見られること、これも確認してきている。

Ⅲ・Ⅳ、および他の助詞の下に付くコソは、小稿のC・D・E・F構文に見られることになる。小稿のC・D・E・F構文に見られる用例が、それぞれ、いかに僅少用例であるかが、こられた、直ちに見えてくるであろう。

小稿は、文を直接構成する文の成分に付いているコソを、A・B・C・D・E・F構文に分類し、その小分類のa・b・c・d・e・f・g・h・i・j・k・l・m・nの代表用例を引いたうえで、適宜、バランスに配慮して、○印用例を配してある。紙数の都合で、止むなく省略した用例があるが、その省略

用例の大半がB構文である。

そのB構文のなかには、△印用例が若干見られる。それらは、A構文としての意識の見られる文である。その△印用例は、A構文について述べているなかにも一部登場させてしまった。それも、表面的にはB構文であっても、本来は、A構文として発想されたものであつたらうと読みとれた用例である。

九、B構文からさらに見えてくるA構文の発想

既に見てきているように、A構文の提題の「―は」の、その「―」に位置する名詞は、その概念をどう受けとめたらよいか、兼好が常時考えつづけていた抽象概念である。提題の「―は」は、そういう意味で、文の成分としては、主題部と呼びたい成分であつた。連体形準体法の準体法体言は、その主題を捉えるために気づいた素材の具体的な動きを活用語で捉えて体言化したものであつた。それを「準体法体言こそ」としてガ格(≡対象格)に位置づけたのだから、述部としての形容詞や形容詞に準じる文の成分からは、対象語と呼んで理解するのは当然である。ただ、それを主部としてしまうのは、当たらない。ガ格に惹かれた誤解であつた。認識する主体からは、補充成分の一つとこそ

見るべきではなかつたか。いま、そう反省している。

既に見てきているように、A構文の提題の「―は」の、その「―」に位置する名詞は、「人は、」の「人」であり、「世は」の「世」であり、「女は」の「女」であつた。前文を受けて想定された「〔一八〕の「―」も、「〔命ハ〕の「命」であり、「〔色ハ〕の「色」であつた。対象語「下戸ならぬこそ」と語順を違えた「男は」も、その「男」は、兼好が考えつづけていた抽象概念語であつた。「下戸ならぬこそ」は、素材として捉えた具体的な動きを体言化したものである。理想の男性の一面である。

B構文として、そこに提題の「―は」は提示されていなくても、さらにはいえば、主題部は言語化されていなくても、第一段の段落構成のうえから、「七夕まつるこそなまめかしけれ。」には、主題部が見えて来て、そこに「秋は、」が、文字化されていなくても、『徒然草』の兼好を知る読者には、自然と読めてくるのである。文から文への展開から、「今めかしきさらかならねど、木だちものふりてわざとならぬ庭の草も、心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度てうども昔おぼ覚えやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。」には、「庭ノ佇マヒヤ家内ノ設ハ」が主題部として、その一文を読み了ると、

読みとれているのである。「汀みぎはの草くさに紅葉もみぢの散りとどまりて、霜しもいと白う置ける朝あした。」は、具体的な描写ではある。しかし、そんな朝は、どんな素材を求めてどういう動きに気づいて捉えたら、すばらしいといえるのか、その観察の結果が、「遣水やりづつより烟けの立つこそをかしけれ。」なのである。そこで、その「朝」が提題となっているのである。その「〔ハ〕」は、表出されていなくても、感じとれたのである。

極端なことを、あえていうと、「折節せつせうのうつりかはるこそ、ものごとにあはれなれ。」は、一旦、「折節は、ものごとによりかはるこそあはれなれ。」と呟いた後、以下の春夏秋冬の展開が見えてしまつて、筆が逸れたのではなかったか。「和歌こそ、なほをかしきものなれ。……、おそろしき猪ぶのししも、「ふす猪ぶの床とこ。」と言へばやさしくなりぬ。」も、その直前、「和歌わがは、……と言へるこそをかしけれ。」と呟いていたかにも思えてきてしまうのである。『徒然草』本文が、「……と言へば、やさしくなりぬ。」となっているのは、その段の冒頭文で「をかしけれ。」を用いてしまつていたからではないか、と思えたりまでしてくるのである。

十、A構文の成立と、兼好の認識の論理

かつて「題述文」「…は…こそあれ」と、その変移・漸移の諸相」という論題⁽¹⁾で、文型の整理と変化の追跡と考察を試みたことがある。『枕草子』などに見る「…は…こそあれ。」という主題部を提示するコソ係結文は、その「…こそあれ。」の「こそ」の上には「に」が脱落しているのかどうか曖昧であったが、江口正弘は、そこに「に」を補うことへの疑問を提出した。⁽²⁾ただ、『源氏物語』の異本間などには、その異文が頻度高く見られ、時代が下るにつれて、その「…こそあれ。」は、主語・述語文としての述語末尾の断定の助動詞「なり」の連用形「に」をその上に定着させて、「…にこそあれ。」となつていったと見えてくるのである。とにかく、「…は…にこそあれ。」とある本文はもちろん、「…は…こそあれ。」とある本文も、いま、現代語訳もののほとんどすべてが、〈…は…である。〉と訳しているのである。

その「…は…こそあれ。」文は、語序を違えて、「…こそ…はあれ。」としても用いられ、さらに「…は…にこそあれ。」ともなつて現れ、さらに、「…こそ…にはあれ。」というようにまで、

変移・漸移を重ねていったのである。その変移・漸移の過程にある一用例を『徒然草』にも見るのである。

○大路見たるこそ、祭見たるにてはあれ。(二三七)

その「:にてはあれ」の「て」は、時代が当代に下ってから入ったものである。「に」と「あれ」とが「は」を排除して、融合すると、断定の助動詞「なり」の已然形「なれ」となって、『徒然草』に頻用される次の文型となるのである。

○家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。(一一〇)

○和歌こそ、なほをかしきものなれ。(一一四)

その「:こそ:ものなれ」は、『源氏物語』にも見られた。

○「:世こそ定なきものなれ」と、いとおよすけのたまふ。

(源氏・一・帚木(一一四))

○「:。ただ、知らぬ涙のみこそ心をくらすものなれ」などのたまひて、:。(源氏・二・須磨(四))

右の前用例も、『徒然草』一四段の用例に同じく、形容詞連体形に「ものなれ」が付いていて、しかも、それらは、名詞文というよりも形容詞文性の感じとれる述部である。後用例も、それに準じて読んでいけよう。やがて、その主部(主語)は、補充成分(対象語)の意識に漸移し、述部には、形容詞が多く

採用されて、形容詞文が顕著になっていったと見えてくるのである。

兼好は、万象を認識する認識のしかたを、彼の精神発達史のなかのある段階で定着させていた。『枕草子』を始めとする和文の文献に見る認識の文体や漢籍・仏典の主題の論述や受けとめて、独自の認識の論理が定着していた。それは、『対象を総括する抽象概念を抽象名詞化してハを添えた提題(≡主題部)を提示して、具体的な動きを捉えた準体法体言にコソを添えた文の成分(≡補充成分としての対象語) + その対象語に対する心象を述べる形容詞を已然形にして結んだ文の成分(≡形容詞文としての述部)』という一文をもって構成されていた。それが、兼好の認識の論理であった。その詳細については、既に前章において、該当用例に即して説明してきている。

兼好の認識の論理は、小稿にいうA構文による認識であった。B構文もまた、実は、A構文であった。C・D・E・F構文は除外してこそ、明快な論考となることを承知のうえで、コソ係結文の全体も見えるよう欲張ることとした。弘融僧都の「不具なるこそよけれ」(八二)を評価する兼好である。整えられた結論など期待するはずがない。あえて、不揃いのままの報告とする。その兼好は、常時、A構文を言語中枢に秘めていた。そ

の態勢で、この世の人間を、その振る舞いを、さらには季節や諸行事をまで観察しつづけていた合理主義の粹人が兼好であった。

注

(1) 大野晋「日本古典文法―その一」(『国文学解釈と鑑賞』至文堂・昭和三十年十二月)など。

(2) 『徒然草』の文章構造に関心を懐かせてくれた出会いの書は、白石大二者『徒然草の語法と文脈』(明治書院・昭和四十五年)であるが、小稿の問題点に直結するものではない。しばらくして、『徒然草講座第四卷』(有精堂・昭和四十九年)からは、「題述文」[…は…こそあれ]と、その変移・斬移の諸相(上)(下)〔『國學院雜誌』第一〇五卷七号・十二号/平成十六年〕執筆に際して多くを学ばせていただいた。殊に、徒然草の言語という項目の 関根俊雄「文法」・増淵恒吉「文章」からは、そこに注記された先行研究に遡ってまで学ぶことができた。小稿に関係するところあるものとしては、徒然草源泉の項の三田村雅子「枕草子」一編が該当した。国語科教師として漠然と感じていたところと全面的に一致する公論で、平易で明快な論述であった。ただ、『枕草子』の、そのコソ係結文が即『徒然草』のコソ係結文と一致するわけではない。その大方の常識を受けて、今回、小稿は、『枕草子』コソ係結文を誤解して、そこに新たな認識の論理が構築されたコソ係結文を定着させた一作品として『徒然草』が存在する、と、言おうと思いついたのである。

(3) 筆者がどうして文節文論を避けて文の構造を説くかについては、その

前年に中学校指導シリーズ国語「口語文法のあゆみ―『学図』のわかりやすい文法―」(学校図書・昭和五十二年四月一日)という32ページの小冊子に述べてある。その『中学校国語』に筆者は現在も編集委員として残していたであり、その文の構造の取り扱い扱いは、現在も基本的には同じ姿勢である。また、この姿勢については白石恭子「佐伯梅友の文法テキスト」(『国文学解釈と鑑賞』一九九五年七月号)が関連する取り扱い方として取り上げてくださった。それは、その後、「いま、文の成分はどう捉えられているか(上)(下)」(『國學院雜誌』第一〇〇巻十号・十二号/平成 十一年十月・十二月)執筆の契機ともなった。

(4) 「係結の構文論的取り扱い」(『文教大国文』10号・昭和五十六年)。

(5) 『徒然草』の句読「『國學院大學紀要』第三十七巻・平成十一年」。

(6) 「補助動詞」あり小論(『田辺博士古稀記念国語助詞助動詞論叢』(桜楓社)所収・昭和五十四年)の第三章において、「麗しうこそありけめ、」(源氏・桐壺)などについていったのが最初か。学習のうえでの取り扱いの呼び方でしかないが、他の用例がすべて文の成分に相当することを認識させるうえで、意味ある呼び方として自負している。

(7) 学校文法などでは主語とか主部とか呼んで取り扱う格のうち、述語や述部となっている形容詞から見て感情の機縁となるものについて、時枝誠記は、その著『国語学原論』(岩波書店・昭和十六年)第三篇「各論」第三章「文法論」四「文の成立条件」二「文における格」(一)「主語格と対象格」(三七三べ以降)において、対象語と呼んでいる。その見方に従い、筆者は、学国文法の主部を、いわゆる主語とこの対象語とに分けて取り扱うことにしている。

(8) 佐久間鼎「日本語の特質」(育英書院・昭和十六年)と三上章「現代語法序説」(『江書院・昭和二十八年)とから名詞文・動詞文を学び、川端善明「用言」(『講座日本語第六卷文法I』)所収/岩波書店・昭和

- 五十一年）から形容詞文を学んだと受けとめるのが常識であろうか。筆者は、この問題を最も早く意識したのは、今泉忠義著『標準国文法』（旺文社・昭和二十九年）の第二編「文と文節（文章論）」の「四」「主語述語の関係」の三用例であった。そこから、それぞれを筆者自身が動詞文・形容詞文・名詞文として受けとめてきている。
- (9) 「放任表現考」（國學院短期大学創立五十周年記念論文集『日本文学の伝統』所収・平成六年）。
- (10) 「連体修飾語を必須とする「さま」「心地」「けはい」などと、その述語となる自動詞「す」とについて」（『國學院雜誌』第一七卷第九号・平成二十八年）。
- (11) 「提題文」：「は……こそあれ」と、その変移・漸移の諸相（上）（下）（『國學院雜誌』第一〇五卷七号・十二号／平成十六年七月・十二月）。
- (12) 江口正弘「こそあれ」考―文型と意味―（『国語学』第五五号・昭和三十三年）。